

味岡一門の「三蔵」系文献と「三蔵」について

中 雅哉¹⁾, 齊藤 宗則²⁾

¹⁾ 関西漢法菖徳之会

²⁾ 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 鍼灸サイエンス学科

受付：平成31年2月14日／受理：令和3年7月12日

要旨：江戸時代前期の医家である味岡三伯については、師である饗庭東庵同様「後世家別派」の医家とされてきたが、それだけでは彼らの医学を知るのは困難である。そのため本稿では味岡三伯の医学を知るべく、「味岡三伯発明」とされた「三蔵」に焦点を当て、味岡三伯と彼の高弟である「味岡家の四傑」たちの「三蔵」に関する書籍を整理し、「三蔵」発案の経緯、「三蔵」における彼らの医学思想を調査した。彼らの「三蔵」とは、五蔵は一つのカテゴリーという饗庭東庵の教えをもとにした、新たなカテゴリーの概念であった。「三蔵」とする事で、『内経』に貫かれる天地人三才思想を浮かび上がらせることになり、蔵象ではなく、「三蔵」に蔵される気血などの、流れを重視した医学観を有することになったと思われる。

キーワード：味岡三伯, 後世家別派, 三蔵, 浅井周伯, 医学流派

第1章 諸論

1.1 研究の背景

我が国における医学史は、主に医学流派による分類に基づき考えられてきた。これは富士川游の『日本医学史』¹⁾の立てた時代区分や流派名の影響の現れでもある²⁾。しかしインターネットの普及などにより、医学古典籍が広く研究者の目に届く機会が増え、例えば『日本医学史』鍼灸項で、16世紀の流派とされた吉田流の起源に関して、日本独自の腹部三脘穴の変遷から考察し、吉田流と匹地流の前後関係に異を唱える³⁾など、従来の流派の捉え方では収まらない事象も語られるようになってきている。

味岡三伯(1629-1698)についても同様のことが言える。富士川游の分類では、三伯は饗庭東庵⁴⁾に師事し、「劉医方」(後世家別派)に所属するとされ、「劉医方」に関しては「金の劉完素の学を世に伝えるもの」と規定している⁵⁾が、後述するように初代東庵の師である曲直瀬玄朔(1549-1631・二代目道三)は、劉完素を折衷主義の一要素とし

て組み入れたことや、東庵の復古考証的な立場⁶⁾から、「彼ら(東庵とその門下たち)を劉完素の学派と呼ぶことは、ほとんど不可能である。」「(医学講説人⁷⁾とされた)饗庭東庵らが、『素問』『靈樞』の講筵を張りながら、劉完素の学を祖述していた、という話には、どうも無理があるのだ。」「実はそのどこにも劉完素の説への共感など、ないのである。」「彼らの理論の根拠が劉完素に限らないことは明白な事実である。」⁸⁾と指摘される。さらに饗庭東庵との師弟関係であるが、東庵の医経研究に重きをおいた研究スタイルは東庵の弟子である竹中通庵⁹⁾(生没年不詳)が継承し、その簡便化(臨床化・通俗化)を味岡三伯が自任している。通庵は万治2年(1659)に江戸に出たため京都の名鑑類には所出しないが、著作からみれば通庵の教育対象は熟達者であり、三伯の対象は初学者である。

このように見ると、味岡三伯はむしろ饗庭東庵と同様に称された「医学講説人」としての結びつきの方が、彼らの関係性を最も鮮明に表しているように思われる。

「都市部では、18世紀ごろを境にして経済的に裕福な階層が医師による診察を受ける機会を確保できるようになった。」¹⁰⁾とされるが、味岡三伯らが活躍しだした17世紀後半を考えると、医療ニーズの高まりの萌芽は見られたであろう。そうならば自ずと医家を目指す者は増加したはずである。それは、医学関連の書籍の増加¹¹⁾からも裏付けられる。

味岡三伯については、伝記などもなく、著作に関連した書籍以外に、人物像を探る手がかりはかなり限られている^{12,13)}。このような状況の中でも近藤鋭矢による報告¹⁴⁾では、味岡三伯の三代にわたる継承の記述が見られる。しかし三伯の学説に迫るほどの手がかりになるまでには至っていない。

そのため、「今後の饗庭東庵とその学統に関する研究は、これまでの通念に固執することなく、伝存する著書などの1次資料から検討すべきと考える。」¹⁵⁾とあるように、まさしく残っている書籍を手掛かりにするしか方法がない。ただしその手がかりになるべき書籍については、弟子による伝書であることが多く、著者の記載に不明な点が残るものが多い¹⁶⁾。これらの事象がさらに彼らの医学の真相を分かりにくくしている。

「味岡家の四傑」¹⁷⁾の中でも、岡本一抱に関しては、「経絡治療¹⁸⁾の背景にある」とされ¹⁹⁾、近年においても書籍が出版されている^{20,21)}。味岡流については、経絡経穴書や腹診書についての研究が見られるが、味岡三伯の発案とされる「三蔵」についての研究は、吉川澄美の論文²²⁾が一つあるだけである。この中で「三蔵」説について、「生理学に相当するかもしれないが、解剖学的なそれを出発点とするのではなく、『先天と後天の生理学』とも呼べるもので、生殖・感情・感覚・言動などの司り、食物摂取とその代謝、排泄などの機能面から、すなわちそれらをもたらす気・血・神・精・津の由来やふるまいとして解いている。」と「三蔵」を生理学的側面で解説し、「このように生理機能に絞って日本で系統的に論じたものはあまり見かけない」と評価している。さらに「成り行く自然の造化が解かれている。そこでは、宋儒的な理窟、

いわゆる朱子学的自然を反映した医学の説明を『人為』として退け、その代わりに『自然の妙理』や『靈妙不測』等の表現を使って窮極的には言語表現し尽くせない生命現象の根源といのちの尊さを弟子たちへ喚起し啓蒙している。」と、修辭的な側面も含めて考察しており、「三蔵」を使用した教育の目的を解き明かしており、非常に参考になる。とはいえ、吉川の論文はあくまで本居宣長(1730-1801)の研究であり、味岡三伯の「三蔵」発案から、味岡門下でどのように継承され、発展していくかについてはふれられていない。

これらの現状を考慮して、本論文では味岡三伯の「三蔵」について調査した。

1.2 研究の目的

「劉医方」(後世家別派)といった流派として捉えられがちな味岡一門の医学的主張を、1次資料である書籍を中心に調査する。その中でも、特に研究の少ない味岡流医学における「三蔵」に焦点を当てる。

初めに現存する彼らの「三蔵」系書籍(後述)を把握し、味岡一門における「三蔵」系書籍の伝承関係に関する仮説をたて、「三蔵」のもとになった発想についての記述を探る。それらの書籍調査をもとに、「三蔵」系文章(後述)の形成の背景を知り、導き出された「三蔵」系書籍の調査結果をもとに、「三蔵」の概念・根拠・主張について考察を加える。最後に味岡一門にとっての「三蔵」の医学的役割、「三蔵」にどのような価値を見出していたのか、「三蔵」が立案されたことで人体に関する認識にどのような変化が及ぼされたのか、後世への影響はどうであったかについて言及し、流派としては見えてこなかった彼ら独自の医学思想の一端を明らかにする。

第2章 「劉医方」(後世家別派)について

2.1 「李・朱医学」からの分派

「劉医方」(後世家別派)とは、「李・朱医学」(「李・朱医方」)からの分派とされる。「李・朱医学」とは、江戸初期に専ら行われていたとされる医学²³⁾で、室町末期から安土桃山時代に活躍した

最も著名な医師とされる曲直瀬道三(1507-96)が、享禄4年(1531)より関東足利学校で、1498年に明より帰国した、医師の田代三喜(1465-1537)が持ち帰った当時の中国医学(嘉靖間に行われてた医学)を学び、日本に導入し、根づかせたとされる医学である²⁴⁾。

「李・朱医学」はその後、秦宗巴(1550-1608)、施薬院全宗(1526-1600)、曲直瀬正琳(1565-1611)、曲直瀬正純(1559-1605)等の諸家に道三学派として唱道されるが、第一の後継者としては、道三の妹の子である、曲直瀬玄朔に引き継がれる²⁵⁾。玄朔は「日本医書講説のはじめ」²⁶⁾という記述も見られるが、玄朔の医学に関しては、道三の医学が「李朱、とくに朱丹溪の医学を宗とした」²⁷⁾のに対して、「同時代の中国と全く同様の折衷主義であり、『外邪に張仲景、内傷に李杲、熱病に劉完素、雑病に朱震亨』という折衷の方法を採用している」²⁸⁾といった特徴が挙げられる。

この玄朔の門弟の一人に初代饗庭東庵がおり、初代東庵の子である二代目東庵と、曲直瀬正純の弟子で後の林(玄伯)家の祖である、林一之進(?-1716)によって提唱された医学を、富士川遊が「劉医方」、別称を「後世家別派」と命名した^{29,30)}。名称については「素霊派」³¹⁾とされることもある。

2.2 饗庭東庵の功績

富士川遊以降の研究によると、『老子道德経会元』(1667刊)では、饗庭東庵は第十二代室町将軍・足利義晴の玄孫と明記され³²⁾、『病家示訓』³³⁾(1793刊)『鹿門隨筆』³⁴⁾(江戸中後期)によれば、「日本医書読(医書講説人)の源流」(ここでの源流とは、後述する『良医名鑑』所載の医学講説人達の源流)³⁵⁾とされる。初代東庵の師の玄朔も「日本医書講説のはじめ」とされるので、師からの継承ではないだろうか。医学については、「明の医家の医経研究に基づくもの」³⁶⁾とされ、「張介賓『類経』を『素問』講釈に導入した嚆矢」であり、『類経』を骨子に『黄帝内経』(以下『内経』)の統一見解を提出した³⁷⁾とされる。功績については『内経』などの医経出版(校訂・付訓作業)への関与から³⁸⁾、東庵に命ぜられて『素問』『靈枢』の業を

継いだ弟子の吉弘玄仍(1643-94)とともに「王冰・新校正本の普及という面で、饗庭東庵ないし吉弘玄仍の果たした功績は大いに認めて良いだろう。」³⁹⁾とされる。著書の構成においても、東庵著の『医学授幼鈔』の編集について、当時の曲直瀬一流の『切紙』と比較し、「系統だてた理論書の趣を呈した」などと評される⁴⁰⁾。

2.3 饗庭東庵の門人

饗庭東庵(二代目立伯)の門人には味岡三伯、上述した吉弘玄仍、竹中通庵、『医教正意』を著した草刈三越⁴¹⁾(生没年不詳)、平井春益(1641-1714)らがいる。味岡三伯は三代にわたり世襲される⁴²⁾。

2.4 医学講説人としての味岡三伯と「味岡家の四傑」

弟子の中でも味岡三伯らは、饗庭東庵の医学を受け継ぐだけでなく、医学講説人という立場をも引き継いでいる。医学講説人とは『皇国名医伝』(1873刊)所収の『杏林雑話』に「講授を任として治療を専らにせず」⁴³⁾とあるように、医学教育・医経研究に重きを置いた医家達を指す。

この医学講説人という呼称は医書講説として貞享2年(1685)刊行の京都案内の書『京羽二重』⁴⁴⁾に見られ、儒者・医書講説として味岡三伯、浅井周伯、井原道悦(原文ママ)の名が明記され、貞享板『京羽二重』を訂正・増補し宝永2年(1705)刊行『京羽二重』⁴⁵⁾(宝永板)にも儒者・医書講説として味岡三伯、浅井周伯、小川朝庵(原文ママ)、井原道悦(原文ママ)、岡本為竹法橋の名が見られる。さらに、正徳3年(1713)の『良医名鑑』⁴⁶⁾でも同様に、医学講説人として二代目味岡三伯(1666-1726)、浅井周伯の子周迪(1672-1753)、井原道閔、小川朔庵を挙げている。このように味岡三伯をはじめ三伯の弟子達は医学講説人として認知されていくが、その中でも三伯の高弟として、浅井周伯、井原道閔、小川朔庵、岡本一抱は「味岡家の四傑」と呼ばれた。

2.5 「味岡家の四傑」の門人

浅井周伯（策庵）は医家浅井家の三代目で、浅井家の内経学の祖⁴⁷⁾とされ東軒（1672-1753）、凶南（1706-82）と代々家学を相伝している。他には戸坂三碩、松岡恕庵（1668-1746）、森嶋玄勝、林恒斎（1659-1720）、泉三益らの弟子がおり、井原道閔には桐井玄淑、小川朔庵には堀元厚（1686-1754）、渡辺蒙庵（1687-1775）、嶺川三折らがいる。本居宣長も小川朔庵の学統に連なる。岡本一抱に関しては貞享2年（1685）32歳で味岡三伯から破門されている⁴⁸⁾（日本医譜⁴⁹⁾では浅井周伯の弟子で、同様に破門されている。）「味岡家の四傑」ではないが、三代目三伯の門人に安藤昌益（1703-1762）がいる。

第3章 味岡三伯発案の「三蔵」について

3.1 味岡流の医学における「三蔵」

本稿で取り上げる「三蔵」とは、五蔵六府ではなく「中焦穀府」「下焦精蔵」「上焦神蔵」の三つの要素で全身をとらえるものである。

原案は味岡三伯が立案し⁵⁰⁾、『内経抜書』編集の際用いた医学経文の分類の由来となるものである。その後『内経抜書』で省略された内容を示すという形で、「三蔵」に関する書籍が著され、五蔵ではなく「三蔵」に依った、蔵象を含む概念であることを示すようになった。

本稿では今回蒐集した「三蔵」に関する書籍を「三蔵」系書籍と呼び、「三蔵」に触れている文章を「三蔵」系文章とする。

3.2 「三蔵」口授について

医学講説人と呼ばれた味岡一門の医学教授は、科目分けされた講義でなされた。このことは龍谷大学大宮図書館の写字台文庫に収められている、松岡玄達自筆の浅井周伯の養志堂における講義録を見てもわかる⁵¹⁾。

この講義録は貞享頃（1684-1688）のものであるとされるが、講義科目に「薬性記」「難経本義」「病機撮要」「本草摘要」「運氣論」「格致余論」「溯洄集」「医学正伝或問」「十四経發揮」が挙げられている。この中の「病機撮要」については、元は『内

経抜書』と呼ばれた書であり、『内経』から重要な経文を「中焦穀府」「下焦精蔵」「上焦神蔵」と「三蔵」の項目に分け解説を加え再編集したものである。この『病機撮要』の「三蔵」について、「三蔵」系書籍に「病機撮要之時ニ略シテ講ジズ」と断りがあることから、教材としていた『病機撮要』の主旨を、さらに明らかにするため「三蔵」系書籍を著したようである。そして「三蔵」は初学者に最初に講義される科目で、味岡流医学の概論といった役割を担っていたと考えられる。このことは、「當流三蔵と云事を立つ。是を以て療治を專要とす。師家の論や此三蔵の理に本て説述する也。」⁵²⁾（1丁裏）『三蔵之辞』（S06、書籍IDに関して後掲表1参照、以下同じ。）「何之傳授も、此の三蔵を教て以後也。諸の醫術の手引にするは、此身之本源を知らず非医者故也。」（1丁表）『三蔵弁解』（S17）などの記述によってもわかる。

第4章 「三蔵」に関する書籍の種類と所在

4.1 調査方法について

書名に「三蔵」（もしくは三臓）⁵³⁾を含むもののうち、味岡三伯の医学に関連した書籍を抽出し、その書籍間の関連性、内容の相違を調査する。調査をもとに「三蔵」の内容を吟味し、変遷を確認する。該当する書籍については写本での流布が多いので、主に伝著者、筆者の関係性をもとに系統を立てる。

4.2 書籍の所在について

国書総目録総合データベース⁵⁴⁾、石田秀実、篠原孝市、長野仁らによるオリエン特出版社刊行影印本解説、三浦忠司⁵⁵⁾・和田耕作⁵⁶⁾の調査報告、杏雨書屋（田中彌性園文庫）データベースをもとに該当する書籍を抽出した結果、以下の21種が確認できた（表1）。

4.3 調査から除外した書籍

今回の調査で、『三臓惣解』（S18）については覚書のような内容で他書との形体が大きく違う、『三蔵辨解』（S19）は所在が不明である、『三臓弁』（S20）は内容が『病機撮要』であった、『三

表1 「三蔵」もしくは「三臓」を書名に含む書籍の所在

ID	書名	目録分類	著者・筆者人	成立・筆者年代	著作種別
S01	『三蔵之弁』(師伝三蔵弁解)	龍谷大写字台 690.9.334-1	井原道閑? 写	江戸中期	写
S02	『医学三臓弁解』	富士川 サ.151	岡本一抱 著	元禄13年(1700)	版
S03	『三臓弁』	内藤 36345	不詳	享保2年(1717)	写
S04	『三蔵弁解』(『小川朔庵三蔵弁解』)	杏雨 4753	小川朔庵 編 嶺川三折 写	享保4年(1719)	写
S05	『三蔵弁義』(『三蔵弁疑』)	杏雨 5256	嶺川三折 自筆稿本	享保6年(1721)	写
S06	『三臓之辞』	乾々 0804	浅井周伯 著	享保9年(1724)	写
S07	『三蔵之弁総解』(『図南浅氏三蔵弁』)	日文研宗田 SC.19.As	浅井図南 著	延享2年(1745)	写
S08	『三蔵弁解』	富士川 サ.152	岡本一抱? 著 堀尾秋実 写	宝暦7年(1757)	写
S09	『三蔵之弁口授』	龍谷大写字台 690.9.322-1	堀元亨 撰著	安永6年(1777)	写
S10	『三臓弁』『枢象』合編	内藤 33356	中尾元高 写	寛政4年(1792)	写
S11	『三蔵弁』	岩瀬 179	井上梗模 写	寛政4年(1792)	写
S12	『三蔵弁』	彌性園 167	堀元亨? 著	不詳	写
S13	『医学三臓弁』	鶯軒 V11.765	井原(主信)道閑 著	不詳	写
S14	『三蔵弁解並麻疹論』	早大 ヤ09.00456	麻疹篇 中俊貞 著 中岐峻 写	不詳	写
S15	『三蔵之弁』	内藤 T0377	不詳	不詳	写
S16	『三蔵弁義』	乾々 0817	浅井政恭? 著	不詳	写
S17	『三蔵弁解』	京大 7-02/サ/31	不詳	不詳	写
S18	『三臓惣解』	乾々 5690	不詳	元禄8年(1695)	写
S19	『三蔵辨解』(『補遺』『三蔵辨』)	龍谷	小川朔庵 編	享保4年(1719)	版
S20	『三蔵弁』上(『病機撮要』)	鶯軒 V11.1251	不詳	不詳	写
S21	『三臓惣解』	神宮	不詳	不詳	写

注1. 国書総目録総合データベースの分類に従い同一とされる書籍が複数ある場合は入手しやすいものを一種挙げた。
 注2. これら(S02を除く)は、いわゆる講義録の様な内容であり同じものではないが、内容としては似たような所が多く見られる。
 注3. 対象と除外したものをそれぞれにおいて、書籍IDについては出版筆写年の古い順で付与した。

蔵惣解』(S21)は入手できなかったことを考慮して、除外した。結果17種を対象とした。

第5章 「三蔵」系書籍間の関連性

5.1 書籍間における類似した「三蔵」系文章

表1で抽出した書籍を見ると、「三蔵(三臓)」が書名につく書籍の多くは「三蔵」以外の内容も合綴されていることが多く、「三蔵」自体は同文であっても、合綴された篇目によって別の書として目録にあげられることが多い。

今回の調査では、「三蔵」を解くときに主に題される篇目である、「(三蔵)総解」「上焦神蔵」「中焦穀府」「下焦精蔵」を「三蔵」系書籍の構成項目としてピックアップした。その結果「三蔵」に言及した部分に同文が見られ、このことを考慮した結果、「三蔵」に言及した文章はA~Lの12種類があることがわかった(表2)。

本稿の趣旨は「三蔵」についてであるので、「三蔵」以外の篇目については調査の対象外とした。

5.2 著者、筆写人から見た「三蔵」系書籍の伝承関係

「三蔵」系書籍の主な時代区分を図1に挙げ、それについて著者、筆写人の人物関係から各書籍の伝承を考察する。

上述したように、味岡三伯は饗庭東庵に師事し、三伯の医学は、「味岡家の四傑」と呼ばれる、浅井周伯、井原道閑、小川朔庵、岡本一抱らに継承される。それはそれぞれの名を外題に冠した「三蔵」系書籍の類似性からも見てとれる。唯一刊行された岡本一抱の書籍については、破門後の出版物であり、味岡一門として見ると他書を全体的に網羅しながらも、「三蔵」系文章で見られない、五行論への言及、薬方の付録など、「三蔵」の枠組みに關しての曖昧さを感じる部分もあり今回の調査ではあまり重要視できないが、他の三名については、比較的忠実に味岡の医学を継承していることがわかる。

今回調査した書籍を見渡すと、『三蔵之辞』(S06)の著者が浅井周伯であり(浅井系とする)、

表2 「三藏」に関連した内容による書籍の分類

ID	書名	編目	種類	三藏に関する編目
S01	『三藏之弁』（師伝三藏弁解）	胃三藏，腎下焦，心上焦，營衛ノ一弁，（師伝三藏弁解）奇経八脈纂要	A	胃三藏，腎下焦，心上焦，營衛ノ一弁，（師伝三藏弁解）
S04	『三藏弁解』（『小川朔庵三藏弁解』）	総解，中焦殺府，下焦精藏，上焦心ノ藏	B	総解，中焦殺府，下焦精藏，上焦心ノ藏
S09	『三藏之弁口授』	目録，下焦精藏，上焦神藏，營衛口授，脈弁，一原三岐之弁	C	目録，下焦精藏，上焦神藏，營衛口授
S12	『三藏弁』	下焦精藏，上焦神藏，營衛弁，脈弁		下焦精藏，上焦神藏
S08	『三藏弁解』	総解，中焦，下焦，上焦		総解，中焦，下焦，上焦
S17	『三藏弁解』	総解，三藏，下焦，上焦，脈之弁，營衛弁，傷寒之弁，瘡痢之弁，陰虛火動用地黄当帰之弁	D	総解，三藏，下焦，上焦
S06	『三藏之辞』	なし（下上中）	E	なし（下上中）
S13	『医学三藏弁』	総解，下焦精藏，上焦神藏，中焦殺府		総解，下焦精藏，上焦神藏，中焦殺府
S07	『三藏之弁総解』（『図南浅氏三藏弁』）	総解，下焦精藏，上焦神藏，中焦殺府，五行相生相剋之弁，榮衛之弁，当帰地黄之弁，格致余論痰瘧之弁，傷寒名目	F	総解，下焦精藏，上焦神藏，中焦殺府
S14	『三藏弁解並麻疹論』	総解，下焦精藏，上焦神藏，中焦殺府，心主三焦之弁，三焦弁，營衛之弁，（右小川朔庵講弁），麻疹篇付録		総解，下焦精藏，上焦神藏，中焦殺府
S15	『三藏之弁』	詳細不詳		詳細不詳
S05	『三藏弁義』（『三藏弁疑』）	三藏総論，論下焦精氣，論上焦神氣，論中焦殺氣	G	三藏総論，論下焦精氣，論上焦神氣，論中焦殺氣
S02	『医学三藏弁解』	目録，総解，下焦精藏，上焦神藏，中焦殺府（附方意），營衛之弁，附神明之弁	H	目録，総解，下焦精藏，上焦神藏，中焦殺府（附方意），營衛之弁
S16	『三藏弁義』	上焦神藏，中焦壳府，營衛之弁，当帰地黄之弁，五行相生之弁，相生相克，相克	I	上焦神藏，中焦壳府，營衛之弁
S10	『三藏弁』『枢象』合編	目次，下焦，上焦，中焦	J	目次，下焦，上焦，中焦
S11	『三藏弁』	中焦殺府，上焦神藏，營衛，五行相生相剋，胞子宮，少腹小腹也胞宮之所居，心主三焦，命門，心主三焦弁，三焦弁，榮衛弁	K	中焦殺府，上焦神藏，營衛
S03	『三藏弁』	三藏惣解，上焦 心，中焦 胃，下焦 腎	L	三藏惣解，上焦 心，中焦 胃，下焦 腎

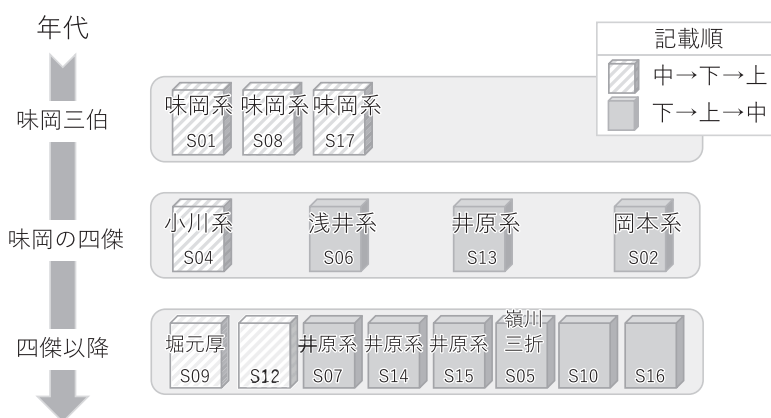


図1 「三藏」系書籍の主な時代区分

『医学三藏弁』(S13)の著者が井原道閑である(井原系とする)。さらに『三藏之弁』(S01)には「悦按當作中焦(悦按ずるに、当に中焦に作るべし。)」

(1丁裏)との書入れが見られる。この書き入れをした「悦」なる人物を考えると、味岡に関連した人物で「悦」の字が付くのは井原道閑しか思い浮

かばない。「関」と「悦」の字の違いについては、第2章で述べた貞享2年(1685)刊行の『京羽二重』の医書講説に「井原道悦(原文ママ)」とあり、『京羽二重』(宝永板)にも同じく「井原道悦(原文ママ)」とあることから、井原道関の筆写本でないかと思われる。

表2で「三蔵」系文章についてA~Lに種類分けした書籍については、例えばFに含まれる4書籍は、「三蔵」系文章の骨子である「総解」「下焦精蔵」「上焦神蔵」「中焦穀府」についてほぼ同文であるが、合綴された篇目に大きな違いがある。著者についても、『医学三蔵弁』(S13)井原道関、『三蔵之弁総解』(S07)浅井図南、『三蔵弁並麻疹論』(S14)中俊貞、『三蔵之弁』(S15)著者不詳と様々である。

これらの著者の違いに関しては、『三蔵弁並麻疹論』(S14)を見ると理由がよくわかる。合綴された「三蔵」系文章に続く篇目、「心主三焦之弁」「三焦弁」「営衛之弁」の後に、「右小川朔庵講弁」とある。これは小川朔庵の論である。そして次に中俊貞の「麻疹篇付録」が続く。先程の「心主三焦之弁」の前の、「三蔵」系文章の終わりには、「三焦(蔵の間違いであろう)之弁畢(終わり)」(14丁裏)とあって区切られているため、「三蔵」は小川朔庵の著作ではないであろう。つまり「三蔵」系文章と小川朔庵の講弁と中俊貞の「麻疹篇付録」が合綴し、著者を中俊貞としている。

『三蔵之弁総解』(S07)については、井原道関の「三蔵」と同一文章を浅井図南と冠していることから、井原道関と浅井図南の師事関係が伺える。しかし、浅井図南は浅井周伯の子孫であり、浅井図南が14歳の時に井原道関は亡くなっている。さらに師匠の文章をそのまま自分の書とすることも考えにくい。これも同じく「三蔵」系文章に合綴された「五行相生相剋之弁」「栄衛之弁」「当帰地黄之弁」「格致余論疹瘡之弁」「傷寒名目」のいくつかが浅井図南の著作だと思われる。このように見ていくと井原系『医学三蔵弁』(S13)のみが「三蔵」系文章だけで構成される書籍であることから、著者である井原道関の「三蔵」系文章が当時味岡一門のスタンダードなものだった可能

性が考えられる。こう考えると井原道関と師弟関係のない浅井図南が引用している理由もわかる。

小川朔庵の周囲を見回すと、『三蔵弁解』(S04)(小川系とする)については、嶺川三折が小川朔庵の著作を筆写しており、さらに2年後に『三蔵弁義』(S05)を三折自らが著している。『三蔵之弁口授』(S09)は堀元亨の著とされる。堀元亨はくすり博物館の『南観衆方考』⁵⁷⁾によれば、作礼園と号し、本書は天保14年(1843)年に序されているので、堀元厚の後裔と考えられる。堀元厚は小川朔庵の弟子である。同じく堀元亨の著とされる『三蔵弁』(S12)は、『三蔵之弁口授』(S09)より読みやすい。

まとめると、「味岡家の四傑」の書籍としては、浅井周伯の伝が浅井系『三蔵之辞』(S06)、井原道関の伝が井原系『医学三蔵弁』(S13)、小川朔庵の伝が小川系『三蔵弁解』(S04)で、『三蔵弁解』(S04)を筆写した嶺川三折が『三蔵弁義』(S05)を著し、さらに小川朔庵の弟子の堀元厚の末裔の堀元亨が『三蔵之弁口授』(S09)を著している。岡本一抱の伝は岡本系『医学三蔵弁解』(S02)である。

先ほどの考察が正しければ、井原道関は、『三蔵之弁』(S01)を筆写していることになり、この書の文末に書かれた「師伝」と云う記載から道関の師である味岡三伯の伝という可能性が出てくる。さらに『三蔵弁解』(S08)と『三蔵弁解』(S17)は、『三蔵之弁』(S01)とかなり類似しており、「三蔵」系文章の篇目である「上焦神蔵」「中焦穀府」「下焦精蔵」を『三蔵之弁』(S01)では「心上焦」「腎下焦」「胃三蔵」、『三蔵弁解』(S08)では「上焦」「下焦」「中焦」、『三蔵弁解』(S17)では「上焦」「下焦」「三蔵」とし、これら三書の「上焦」の篇に関しては本文中に「神」にまつわる記述がほとんどされていない。これより、「三蔵」系文章は『三蔵之弁』(S01)、『三蔵弁解』(S08)、『三蔵之弁』(S17)が他の書籍群より、初代味岡三伯の伝に近いと推察される(味岡系とする)。

5.3 篇目による「三蔵」系書籍の分類

「三蔵」系文章における「中焦穀府」,「下焦精

表3 篇目の順番による「三蔵」系書籍の分類

ID	書名	分類	順	三蔵に関する編目
S01	『三蔵之弁』（師伝三蔵弁解）			胃三蔵，腎下焦，心上焦，營衛ノ一弁，（師伝三蔵弁解）
S04	『三蔵弁解』（『小川朔庵三蔵弁解』）			総解，中焦穀府，下焦精蔵，上焦心ノ蔵
S09	『三蔵之弁口授』	a群	中→下→上	目録，下焦精蔵，上焦神蔵，營衛口授
S12	『三蔵弁』			下焦精蔵，上焦神蔵
S08	『三蔵弁解』			総解，中焦，下焦，上焦
S17	『三蔵弁解』			総解，三蔵，下焦，上焦
S06	『三蔵之辞』			なし（下上中）
S13	『医学三蔵弁』			総解，下焦精蔵，上焦神蔵，中焦穀府
S07	『三蔵之弁総解』（『凶南浅氏三蔵弁』）			総解，下焦精蔵，上焦神蔵，中焦穀府
S14	『三蔵弁解並麻疹論』			総解，下焦精蔵，上焦神蔵，中焦穀府
S15	『三蔵之弁』	b群	下→上→中	詳細不詳
S05	『三蔵弁義』（『三蔵弁疑』）			三蔵総論，論下焦精氣，論上焦神氣，論中焦穀氣
S02	『医学三蔵弁解』			目録，総解，下焦精蔵，上焦神蔵，中焦穀府（附方意），營衛之弁
S16	『三蔵弁義』			上焦神蔵，中焦壳府，營衛之弁
S10	『三蔵弁』『枢彙』合編			目次，下焦，上焦，中焦
S11	『三蔵弁』	c群	下→中→上	中焦穀府，上焦神蔵，營衛
S03	『三蔵弁』	d群	上→中→下	三蔵惣解，上焦 心，中焦 胃，下焦 腎

蔵，「上焦神蔵」などの篇目の順番については，それぞれの著者によって拘りがあつたらしく書籍間で違いが見られる。「三蔵」系文章に見られるこれらの篇目は、『内経抜書』において、『内経』から抜き出した経文を分類する際にも見られる項目であるが、『内経抜書』では順番について，「三蔵のうちで最も重要な蔵は，水穀が入るところであり，後天的な気血營衛を生成するところでもある中焦穀府である。よってまずこれが最初に論じられなくてはならない。」と書かれている⁵⁸⁾。このようにはっきりと篇目の順番を定義した『内経抜書』に対して，同様に書籍間で様々な理由づけがなされ，順序が異なる「三蔵」系文章のこれらの特徴は，変遷を迎える一つの手がかりになると思われる。一覧を表3に示すが，各書籍の篇目順序は大きく「中→下→上」「下→上→中」「下→中→上」「上→中→下」のa群～d群4つのパターンに分類できることがわかる。

5.4 三蔵系書籍の変遷

これまでの考察を振り返り，時代変遷を考える。まず味岡系『三蔵之弁』（S01）と『三蔵弁解』（S08），『三蔵弁解』（S17）は篇目の順番が『内経抜書』に準じたものとなっている。しかし「中焦

穀府」「上焦神蔵」「下焦精蔵」とは言わず，「胃三蔵（三蔵・中焦）」「腎下焦（下焦）」「心上焦（上焦）」としていることから同様の篇目のある『内経抜書』よりさらに旧態を残している可能性がある。そしてその順番と同じものが，小川系『三蔵弁解』（S04），『三蔵之弁口授』（S09）堀元亨著である。堀元亨は上述したとおり堀元厚の後裔と考えられ，堀元厚は小川朔庵と師弟関係があるので，小川朔庵一門は篇目の順番において味岡系の流れを汲んでいることがわかる。

そして分類上一番多く見られたのが，分類bにあげた下焦，上焦，中焦（下→上→中）の順番で編まれた書籍群であるが，浅井系『三蔵之辞』（S06）は，篇目が見当たらず，内容から順番を立てた。この書に関しては，篇目がないことに加えて，他の書より比較的簡素な内容で，おそらくb群「三蔵」系文章の中でも原型に近いものではないかと思われる。しかし本文中に『内経抜書』という書名が見られるので，『内経抜書』よりは後代の書であることは確かであるし，味岡系では見られない，「中焦穀府」「上焦神蔵」「下焦精蔵」という名称についても，本文中には見られる。「味岡家の四傑」でも一番古株である浅井周伯は，師の味岡三伯の立案である「三蔵」をきっかけに『内

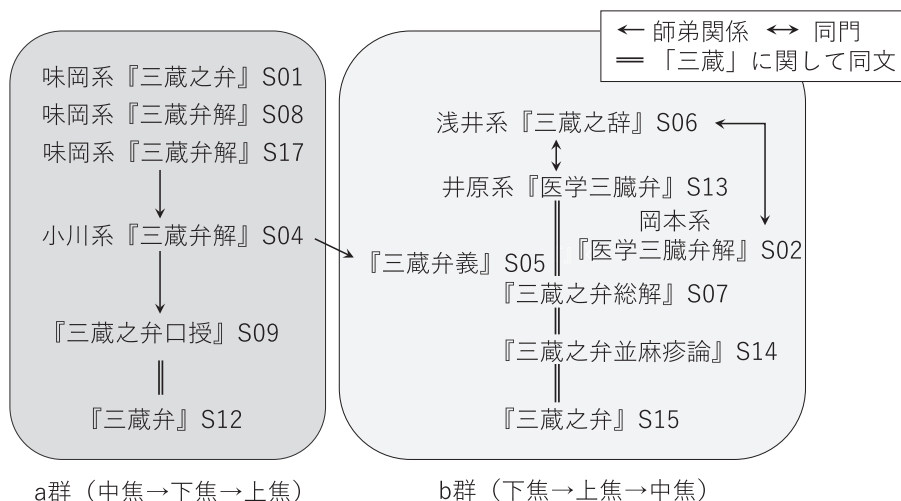


図2 「味岡家の四傑」の書籍の関連

経抜書』を記し、『内経抜書』を記したあと、浅井系『三蔵之辞』(S06)を構想したのではないだろうか。

これらと同じ篇目順b群の書籍には、井原道閔の著作である表2の種類F(井原系)が多く含まれる。その井原道閔は先ほど味岡三伯著と考えた味岡系『三蔵之弁』(S01)を筆写している。この二書については、篇目の順序に変化が見られる。おそらく井原道閔は「三蔵」系書籍として著す際に、浅井周伯が浅井系『三蔵之辞』で行った篇目の順序変更に倣ったのではないだろうか。つまり師である味岡三伯の順番ではなく、同じ三伯の弟子である浅井周伯の順を踏襲したということになる。

これらをまとめると、「味岡家の四傑」の中でも、味岡三伯の立てた順番を汲んだ小川朔庵と弟子の嶺川三折、さらにその再伝の弟子の堀元亨の伝があり、三伯の立てた順を変えた浅井周伯とそれを汲んだ井原道閔、岡本一抱の伝があるということになる。そして後代は周伯の立てた順番の書が多くなっている(図2)。

第6章 書籍間の比較

表1で示したとおり「三蔵」に関連した書籍は21種あり、今回は17種を研究対象としている。これら17種の書籍については岡本系『医学三蔵弁

解』(S02)を除けば、全て写本であり講義録のような内容になっている。文章の数や表現法の違いなど、書籍間で様々な違いが見られるが、「三蔵」系書籍として大きな内容の違いは見られない。

しかし時代を経るごとに、内容を補佐する具体的表現が多くなる傾向や、新しい表現が出てくる。表4では、今回蒐集した書籍の中で唯一頭注に小見出しがついている岡本系『医学三蔵弁解』(S02)の小見出しに基づき、各書の内容の相違を示した。判断の基準として、少しでも関連した内容を含むものについては「○」、全く触れられないものを「×」とした。

岡本系『医学三蔵弁解』(S02)は、最も多くの内容を収録し、他の書籍の内容を全体的に網羅していることがわかる。それは唯一の刊行物ということも要因にあると思われるが、岡本一抱自身が味岡三伯から破門にされている事から考えて、逆に流派内における自由な折衷が可能だったのではないだろうかとも考えられる。

表3でa群(中上下)に分類された書籍間では、収載内容に類似性が見られる。b群の書籍を見ると、井原系『医学三蔵弁』(S13)と同群他書との項目に重複が多く、類似性が比較的高い。それらと岡本系『医学三蔵弁解』(S02)を比較すると、相互間の類似性は低くなり、岡本系書籍は(井原系に基づいた)味岡流医学の継承だけではない、

表4 「三蔵」系書籍間の相違

No.	篇目	小見出し	a群				b群						c群		d群	
			中上下				下上中						下中上		上中下	
			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L		
			味岡系	小川系	掘系	味岡系	浅井系	井原系		岡本系						
	総解		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
1	下焦精蔵	下焦精蔵	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
2		右腎命門	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○		
3		金生水	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×		
4		腎蔵精	×	×	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	
5		陰虚脱肉	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×		
6		五液属腎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
7		牙齒白色	×	×	×	×	○	○	○	○	○	×	×	×		
8		生骨黑色	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
9		溺下下竅	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○		
10		精路	○	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○		
11		男女泄精厚薄	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○		
12		房後陰痿	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
13		父精生胎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
14		十月留胎	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
15		茎戸	×	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○		
16		経水	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○		
17		子宮	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○		
18		胞衣	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○		
19		胎中留血非瘀血	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×		
20		経水非瘀血	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○		
21		子門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
22		胎向母	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○		
23		孕婦採豆	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○		
24		雙胎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○		
25		産十月	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○	×	×		
26		乳汁	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○		
27		男女受胎	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○		
28		氣化形化	×	×	×	×	○	○	○	○	○	×	×	○		
29		子宮有鏽	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×		
30		惡阻	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	○		
31		男女變声	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	○		
32	上焦神蔵	上焦神蔵	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
33		神精	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○		
34		火水	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
35		心血	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○		
36		五志	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○		
37		神用	×	○	○	×	×	×	×	○	○	×	×	○		
38		神味	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	○		
39		心気肺氣	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○		
40		神陽位心	×	×	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×		
41		肺肝位心腎之上	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
42		形生於氣	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
43		氣海	×	○	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
44		病似無神虚	×	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×	○		
45		陰陽有余不足	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
46		藥劑補血氣	×	×	×	×	○	×	×	○	○	×	×	×		
47		蔵象	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
48		脈神	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
49	中焦殺府	中焦殺府	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
50		王道霸道	×	×	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×		
51		水土一体	×	×	×	×	○	○	×	○	○	×	×	×		
52		以胃爲貴	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	○		
53		四支属胃	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
54		消殺	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
55		腎虚及胃	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
56		胃虚及腎	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
57		水殺留胃	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×		
58		宗宮衛持相火	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	○		
59		宗宮衛	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
60		脈別陰陽	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
61		胃府大小	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	○		
62		四肢爲諸陽本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
63		殺氣薰肺	×	×	×	×	○	○	○	○	○	×	×	×		
64		年老漸失先天	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
65		五味属胃	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×		
66		服藥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
67		水殺分利	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	○		

付加された部分も多い書であることがわかる。事実、「三蔵」系書籍全体で他書には見られない、「方意」という治療法の篇目が増えられている。

さらに、a・b群間の相違であるが、b群の方が下焦の内容が多い傾向が見られる。これは、初期の形態を匂わせる味岡系『三蔵之弁』(S01)で「重要なので中焦を最初に弁じる」としたa群の篇目順を、浅井系『三蔵之辞』(S06)を嚆矢として「重要なので下焦を最初に弁じる」(b群)と変更する際に、「下焦」の重要性を解く内容が増えたためと考えられる。つまり、同じ味岡三伯につながるとされる医家たちの間でも、味岡三伯の書籍に従った小川朔庵とその弟子の嶺川三折らの書籍に対して、篇目順を変更し、下焦の内容の充実を計った、浅井周伯、井原道閑、岡本一抱らの編纂意図の違いが伺える。

第7章 味岡流における「三蔵」

初代味岡三伯の伝に近いと推察される味岡系『三蔵之弁』(S01)を中心に内容を列記し、各書の関連を考慮して、三伯と「味岡家の四傑」における「三蔵」の変遷の過程を考察する。なお岡本系『医学三蔵弁解』(S02)に関しては、味岡から破門されていることを考え、今回の調査では重視しない。書籍名は第5章で付けた系統名で表す。

7.1 味岡三伯の「三蔵」とは

(引用1) a「夫三蔵は心腎胃之三つを云也。」
 b「三蔵者より臆説似たり、而全不經之説非ず。」
 c「二蔵一府と云ざる者は、靈蘭秘典論五蔵別論等に皆府を蔵と云こと多し。故に胃を蔵の類に用るなり。」
 d「人の生に而不絶は、男女之道あるを以也。男子の一滴之精女子の子宮に入り、十月にして生る。此腎の独り能する所に非ず。心蔵に感而後、心腎之二つの持合にて、此れをなす。」
 e「況や心は君臣之官にして七情も尽く心の主也。」
 f「さて男子の一滴之精、子宮に留るものを即先天元氣とする也。これに生て乳汁にて養ひ立る此を後天之元氣とす。此の後天之養ひは、胃之府に非れば能わず。病に臨み薬を服し命を全ふすること皆胃之府……」
 g「五蔵六

府之中此の三蔵を最重しとする處なり。」(1丁表裏)(味岡系)

味岡系の「総解」からの引用である。「総解」とは表4を見てもわかるが、「三蔵」系書籍では必ず記される項目で(篇目が無い場合もある)、「三蔵」の重要性を説く部分である。味岡系の「総解」は他書に比べて文字数が少ない(味岡系1丁、浅井系1丁半、井原系2丁、小川系3丁半、岡本系2丁)が、これをみると三伯は「三蔵」(引用1a)について、「憶説や『内経』の意図から外れたものではない」と述べ(引用1b)、胃については「蔵の類である⁵⁹⁾」(引用1c)と断りをいれた上で、「三蔵」を「人の出生にかかわる腎」(引用1d)、「人の出生にもかかわり、七情をつかさどる心」(引用1e)、「先天を養い、薬効を運ぶ胃」(引用1f)として規定し、「最重視した」(引用1g)ようである。味岡系では、「上焦神蔵」「下焦精蔵」「中焦穀府」という名称は見られない。

7.2 味岡一門が唱える「三蔵」の重要性

味岡系の「総解」は上で述べたが、他書では「三蔵」の重要性をさらに述べるようになる。

(引用2)「此三蔵之弁は醫道一流の干要にして、諸の医書を見るに、日用の助けとなるのみに非ず。今日療治の為に成る事也。医為る者、一身の依て来る処、人身の形体を明かに察するを專一とすへし。」(1丁表)(井原系)

「三蔵」の重要性については、「医書を読む際に役に立ち、治療の為にもなる」といい、「三蔵」を学ぶ目的は「人がいかに生じるかということと、人身の形体を明らかにすること」(引用2)とする。ここでは、中焦の重要性は謳われない。

(引用3)「今、三蔵と云事は事改て聞く。然れども私の新説に立てるに非らず。素問未亡篇之亦從容論篇に三蔵と云名目出たり。雖然素問の三蔵は肝脾腎の三蔵にして反異す。」(1丁表)『三蔵弁』(S03)

「三蔵」が憶説でないことについては、「今、三蔵ということはあらたに聞くかもしれない。しかし私が新説を唱えたのではありません。『素問』示從容論篇に三蔵という名目が明記されています。『素問』の三蔵は肝・脾・腎の三蔵だが、異なっていないのです。」(引用3, 著者意訳)という、味岡系の文章(引用1b)に新たな断りも付け、三蔵の配当に関して意味合いの異なる経文を呈してまでも、「三蔵」というのは『内経』に記された事柄であり、あくまで『内経』に基づく事を強調し、師伝の正しさを訴えている。

(引用4) a「今、心腎胃と言はずして、名を(神蔵・精蔵・穀府と)変ゆるは、五蔵は五つ成るも三つに帰する故也。」(1丁表裏) b「病人に対して療治するに、五臓六腑を尽く引き表すことは、事繁して多岐亡羊の惑あらん。」(1丁裏)(井原系)

さらに「心腎胃」と言わず、「上焦神蔵(心)」「下焦精蔵(腎)」「中焦穀府(胃)」と変化させたことについては、五蔵の中から、三つの臓を抜き出しただけではなく、「五つなるも三つに帰する」(引用4a)とする。この宣言の根拠については後述する。

彼らが主に初学者を対象とした医学講説人だったことは上述したが、このような単純化ともとれる作業は、対象となる受講者に向けた策だとも言える。そのことは、「五臓六腑を尽く引っ張り出し実態を明らかにすると、する事が多くて煩わしくなりどうしていいのか迷ってしまう。」(引用4b, 著者意訳)という言葉からも伺える。

このように「三蔵」の重要性に関しては、味岡系よりも、それ以降の書籍において多く語られる傾向がある。味岡三伯の発案の時よりも、「三蔵」による講説の需要が高まったことの表れではないかと思われる。

7.3 中焦の役割

(引用5) a「又精血は中焦にて不生也。水穀を中焦にて消化し、胃火を以一身中に蒸上す。其の

むし上る潤か脉中に入り、先天より血中に入り、乃変而血と成る也。此を營と云。又津液が腎中に入ては則髓に例ふこと……(精となる。)⁶⁰⁾(2丁裏)(味岡系) b「精神を立は何そとなれば、中焦穀府に帰する也。十二経を流通し、気血生ずるは胃の府養ひなり。」(9丁表)「營は血、衛は気、皆源は胃中より出ることなり。」(11丁裏)(浅井系) c「中焦を後天の元気として肝要とするは、博く万物を生ずると云も、陰陽と交る気と三つ在こと也。」(2丁表) d「今日皮膚毛髮までも養う物は、此宗營衛三気也。」(24丁裏) e「書籍の上にて、種々の説多けれども、推し施いて言すは、唯一つの水穀の気と心すべし。」 f「三気とも一身表裏に悉く遍満したる物にして、相離れては不立者也。」(25丁裏)(井原系)

中焦については、味岡系は「総解」で「先天を養い、薬効を運ぶ胃」(引用1f)として、「三蔵」に採用したが、この胃が養う先天とは、血と精を指している。養うとは、「水穀が胃火の働きによって營気と津液(共に後天)になり、その後先天の血と精に変化する」(引用5a)ことを指している。味岡系の先天は精と血のみで、気の生成についてはふれられない。浅井系では先天に精神気血を、後天に衛気營気を割り当てている(引用5b)。

井原系では、中焦の重要性に「陰陽と交わる気」(引用5c)という新しい視点を取り入れている。これは陰陽の交流の場としての中焦の重要性と説いている。さらに井原系では後天を「宗気・衛気・營気の三気」(引用5d)だとし、それぞれの生成過程まで述べるが、最終的には「書籍上では色々な説があるが、推し量って言えば、ただ一つの水穀の気と心せよ。」(引用5e, 著者意訳)と結論づけ、あくまでも「三気とも全身を悉く遍満するもので、互いが離れては成立しない」(引用5f, 著者意訳)と一つの水穀の気であることを強調する。「東庵一派の医学は(中略)中国医学の理論と、経験的事実との間に、乖離があることを、しっかり見つめてもいた。」⁶¹⁾とあるが、再伝の弟子である彼らの文章にも、こういった彼らの経験

との乖離に対する処理は多く見られる。まとめると、味岡系では先天=精・血、後天=津液・営気としていたのが、先天=精・神・気・血、後天=衛気・営気（・宗気）へと理論的に発展したのがわかる。さらに井原系では、中焦の重要性に「陰陽を交流する気」としての側面を付加している。

7.4 下焦の役割

7.4.1 男女の交合

(引用6) a「腎は精藏也。十四椎の両傍に有。(中略)七節の傍に小しき陽気の有り、命門と名く。此は男女ともに同きこと也。人の生の□皆此の命門に預る也。」(3丁表裏)(味岡系) b「天一生水此理にて、萬物一として水気無きところには不生。」(1丁表)(浅井系) c「阴阳の兩精あつまり、凝滞して萬物の形を生ず也。人の形をなすも水気の凝滞よりして生ずる也。(中略)是天人合一の理、則天一水を生ずるの義なり。」(2丁裏) d「易を以て之を論ずれば、則乾元資て始、坤元資て生、万物皆然。(中略)天陽之施し、地の養い^{そだ}育つる所は、天氣を受けてなす也。」(6丁裏)(井原系)

人体の発生についての文章であるが、人は腎精からなることを説いている。味岡系を見てみると、「男子の一滴の精が子になる」(引用1d)とあり、それには腎の働きだけでなく、「心腎の二つの持合」(引用1d)が重要だとしている。ここでの心と腎との関係は、心の感動により、腎の一滴の精が生成されるという契機としてである。さらに命門が人体の生成に重要とし(引用6a)、腎陰中の気的重要性を説いている。

浅井系は、さらに「天ははじめに水を生じる(五行の最も先となること)道理によって、万物は一つとして水気の無いところには生じない。(人体も同じで腎精から生成される。)」(引用6b、著者意訳)という言葉を加え説明している。井原系でも、「陰陽の兩精が集まり、凝滞して万物の形を生じる。人の形も同じで、水気の凝滞から生じる。この事は天人合一の理論で、天ははじめに水を生じるといふ条理です。」(引用6c、著者意訳)と説

明し、さらに「易で論ずれば、乾元のはたらきは、これをもととして始められ、坤元のはたらきは、これをもととして生みなされる。万物は全てそうである。(中略)天陽の施しが地面の養いを受けて育つのは、天の気を受けるからである。」(引用6d、著者意訳)という例えを使って、「乾元」や「天陽の施し」を腎精(父の精)に擬え、腎精(父の精)のみが子になると説いている。

小川系に関しては、天人合一論として取り立て述べてはいない。

7.4.2 腎精と命門について

(引用7) a「扱て精与相火の分ちは、^な無きことなり。只相火と云は、腎中の氣を指て云なり。故左右(の腎)ともに精と氣は有るものなり。」(2丁裏) b「精と云は五藏六府の津海、一身に布き充たる液が、再び化して腎中に入て精となるなり。」(3丁表)(浅井系) c「北方は陰の至極にして一陽来復するの理也。」(4丁裏5丁表) d「其一滴の精中に備る陽氣、即人となりて腎中に備る陽氣にして、是を先天の元氣と云。(中略)それを心の神氣と云は、其精中の一元氣の尤精粹成物を云。」(19丁裏)(井原系)

命門に関しては、味岡系を除いて『難経』の左腎水右命門説を否定している。(味岡系では触れられていない。)そして「精と相火は分別なく一体のものである」(引用7a)という認識が見受けられる。腎精の生成についても同様に、味岡系以外で共通しており「全身をめぐった津液が再び化して腎精となる」(引用7b)と記述される。さらに井原系では、腎精中の一氣と方位(季節)を関連させ、「陰が極まり、再びおこる一陽が腎中に宿る」(引用7c)と述べている。これも天人合一論の現れだと思われる。そしてこの一氣は、「大本は父の精中の一氣」(引用7d)だとしている。後述するが、この父の精中の一氣の最も精微なものは胎児の神氣(心)にもなる(引用7d)。

7.5 上焦の役割

(引用8) a「心藏は、母の胎内に一滴の精を受し

より、則自然と備わる処の一気なり。一滴の精中に氣を含む。其氣なきときは精も則腐水と同じ（中略）此一元氣の有を以、今日の人となるなり、其精中の一氣、即兩乳の間に留て心となり、千緒萬端皆此心が至るなり。」（6丁裏）b「心の上にて躰用を別つなり。心を本躰として、一身に満ちて有る陽氣は用と云也。」〔（体内の陽氣）の精粹⁶²は、其兩乳の間臚中に集りて成心なり。〕（7丁裏）（味岡系）c「天地開闢の時は氣化を以て生するなり、其後人より人を生するは形化也。」（2丁表）「神氣人身に布き満て有なり。それ一身に満る處の氣、尤精粹なる者を名て神と云。」（7丁裏）d「臚中に血有て其潤^{うる}ひを以て、神氣を養う也。」（7丁裏）（浅井系）e「心そと云は其神の舍る處の名にして、神は則其内の主人也。」（18丁表）f「神は燈火の光の如く、血は油の如し。（中略）神は心の藏に居て、其光の末は一身に及者也。其光の一身に及は血の養ふ故也。」（20丁表）（井原系）g「神は燈火の如く、宗氣は油煙の如し。」（小川系）

上焦について味岡系を見ると、「父の一滴の精の中に備わる一気が、子の心となる」（引用8a）とする。この一気は、父の「命門の火」（引用6a）と関連しており、子の臚中に留まり千緒萬端をきわめる心になるだけでなく、この氣が無いと精自体が役に立たない（腐水）としている。先程の水火一体（引用7a）の表現である。上述したとおり、味岡系では右命門説にはふれないが、腎精中の氣が離れては、腎精が成り立たないという認識は見られる。そして心については、体用（本体とその作用）で表し、「全身に満ちる陽氣を用とし、心を体として、心は臚中に留まる陽氣の精粹から成る」（引用8b）とも示されている。

浅井系では、「天地開闢⁶³の何も無いところから人が誕生したことを『氣化』、誕生した人が人を生むのを『形化』」（引用8d）と表現し、味岡系の説く臚中に宿る陽氣の精粹（浅井系では神）も、「氣化」を考えれば天から受けたもの（天の陽氣）であると述べる。ここでも神の陽氣と天の陽氣を対応させることで、天人合一論を浮立たせてい

る。そして蔵象として、臚中に有る血の潤いが神氣を養うとしている。

味岡系の「三蔵」で臚中の陽氣の精粹として示される心は、浅井系では神で示され、味岡系に神は出てこない。理由は「心というのは場所の名前で、神はその中にある主人を指す」（引用8c）とする井原系の記述ではっきりする。心神の表記は味岡系以外では共通しており、味岡系以降では蔵する場所である心より、そこに宿る神こそ重要であると理論が変化発展している。

浅井系で説かれた神を養う血については、井原系では喩話を交えて内容を付加している（引用8f）が、小川系では同じ喩話を添えながらも、「神を養うのは宗氣である」（引用8g）と、異なる説を述べている。このような「三蔵」系文章における、明らかな意見の相違は珍しい。

7.6 「三蔵」の蔵象

（引用9）「南方の離火（の卦）には陽生して陰の始と成、北方の坎卦には一陽生して陽始る処と成如く、心陽中には血有。腎陰⁶⁴中には氣の有り。皆一理也。」（20丁表）（井原系）

「三蔵」の蔵象は、それぞれの関係性に重点が置かれる。つまり上・中・下焦に振り分けられた「三蔵」が、「上下で交流し、中が交流を助ける」（引用5c）関係である。この関係性を成立させるのは、各蔵に内蔵された精神氣血中氣（宗宮衛）である。これは上焦神蔵に含まれる神と、下焦精蔵に含まれる精と、それぞれが生み出す神氣と精血を養う中焦穀府が担う中氣（宗宮衛）であるが、上焦の氣が下焦に含まれ（引用7d）、下焦の血が上焦に含まれる（引用8d）という形で、上下の氣血の交流をイメージさせる。さらに「南方の離の卦では、一陰が生じて陰の始めとなり、北方の坎の卦では、一陽が生じて陽の始めとなるというように、心の陽中には（陰である）血があり、腎の陰中には（陽である）氣がある。」（引用9、著者意訳）と卦象を挙げ、それら上下の交流をより明確化させるように示している。

そして「皮膚毛髮まで」（引用5d）という例え

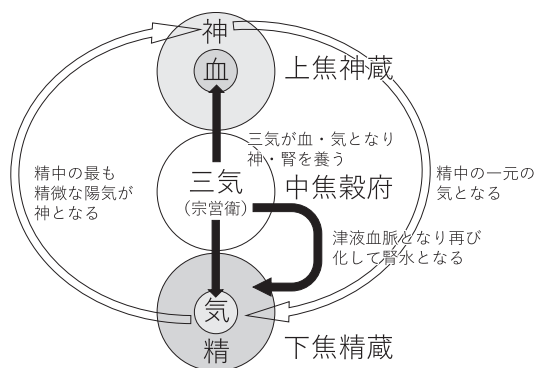


図3 三蔵の模式図

で、気血が体全体にめぐることが強調し、この上下に交流する気血を養うのが中焦穀府で生成される宗營衛の三氣(中気)だとする(図3)。ここでは、中焦穀府は上下の交流を運動面からも物質面からも支えていることになる。

このような上下の交流を意識させる「三蔵」の蔵象が見られるのは浅井系からで、井原系がもっとも顕著である。味岡系では「三蔵」それぞれについての重要性が個別に記されるが、あまりそれらの交流を連想されるようには書かれていない。小川系も味岡系程ではないが、上下の交流についてはあまり意識されていないように感じる。

中焦の重要性を「陰陽と交わる気」(引用5c)と表現した井原道閔であるが、おそらく、物質的な養いではなく、天地の気のたえまない昇降と循環を、心と腎との交流の中間にある胃に擬え述べたのであろう。そう考えると、交流の契機となる天地陰陽が二つに分かれた事(天地開闢)の方が中焦の働きよりも重要となり、「天一生水」で表現した、万物の始まりに関係する下焦こそ最も重要であるとした、浅井周伯・井原道閔の思想背景を伺うことが出来る。これは、表4における、下焦の内容の増加を見ても明らかである。

7.7 病証

(引用10) a「又肺気の虚すると云も、本心に不足する處在る故なり。療病の上に於ては、虚の甚だしからずは気血の不足とし、虚甚は心腎の虚なり。」(8丁裏)(浅井系) b「何に病にも、神

の虚か実か、血(の)虚か実か、気の虚か実か、精の虚か実か、中気の虚か実かと云とき、肺は氣を主るとも気の虚実は心^{あづか}に与り、肝は血を蔵^{かく}せとも血の虚実は精^{あづか}に与り、中気の虚実は胃^{あづか}に与ること也。」(1丁裏2丁表)(井原系)

病証については、「三蔵」に含まれる精・神・気・血・中気(三氣)五つの虚実を重視している。上焦では「全身にめぐる気の最も精粹なものが神。」(引用8c)であり、下焦では「中焦でから出て、五蔵六府をめぐった津液(血)が、再び変化して腎中に入ったものが精。」(引用7b)とあるように、五蔵では語られていない。つまり、「肺が主る所の気の虚実は心が預かり、肝に蔵される血の虚実は精が預かり、中気の虚実は胃が預かる」(引用10b)という「三蔵」の分類で病証を捉える。具体的には「また、肺気が虚していても、それは元々心に不足があるからである。治療の際は虚がきつくなければ気血の不足とし、虚が甚だしい時は心腎の虚とする。」(引用10a, 著者意釈)としている。

第8章 味岡一門にとって「三蔵」とは何であったか

8.1 「三蔵」というカテゴリー

彼らにとっての「三蔵」とは、五蔵で表された身体観を、新たに「三蔵」という概念で捉え直すことであった。それは初学者への教育のためであり、『内経』を再編集してまとめ直す分類項目にも使われた。

味岡三伯は「五蔵六府の中で最重要」(引用1g)として「三蔵」を抽出したが、浅井周伯からの伝承も手伝って、井原道閔は「五蔵成ルモ三ツニ帰スル」(引用4a)と「三蔵」概念を発展させた。この発展は何によって、もたらされたのであろうか。石田秀実⁶⁵⁾は師である饗庭東庵が『切紙』類「五蔵六府」のなかで述べている五蔵について、「カテゴリー的な命名」と述べている⁶⁶⁾。さらに『精神気血管ハ、五蔵ノ本ニシテ、肝心脾肺腎ト云ハ末ナリ』なのである。宿り場に過ぎない五蔵は、一つの指標にすぎず、それを通して『根本としての気』にまなざしを注ぐ医学の在り方が、明確に語

られている。」⁶⁷⁾と述べる。そう考えると、五蔵はカテゴリー分けの一つで、大切なのは内蔵される「根本としての気」(精神気血營)であると師から学んだ周伯以降の再伝の弟子たちが、三伯が抽出した「三蔵」に、新たに三焦の場の概念を取り入れ、蔵される「根本としての気」五つ全てを「三蔵」というカテゴリーで再配分することによって、「五蔵成ルモ三ツニ帰スル」(引用 4a)と言わしめたのではなかろうか。

8.2 天地人と「三蔵」

新たな三焦の場の概念はどう形成されたのであろうか。同じく石田は、東庵が『切紙』類「五蔵六府」の中で「精は腎に宿り、血を生み、血は肝に宿り、神は心に宿り、気を生み、気は肺に宿る、そして後天の土が四蔵をめぐみ養う」とし五蔵の根本である精・神・気・血・營を隔膜の上下に配置した事について、「隔膜より上を陽、下を陰とカテゴライズした」と考察している⁶⁸⁾。

だとすると、このカテゴライズ(図4)を元に、五蔵の「根本としての気」と三焦を組み合わせることで「三蔵」(図5)の場の概念が生まれたと考えられないだろうか。

さらに三つに分けることで、上焦で表された神蔵一天、下焦で表された精蔵一地、中焦で表された穀府一人のように、身体観と天地人三才思想が結びつく。これは井原道閔が主張した天人相関に繋がり、『素問』に貫かれる思想と合致する。松田博公は著述の中で「陰陽論、五行論自体が天地宇宙の法則を使うための論理的、技術的ツールであった(中略)。この考え方を、『内経』の原型を作った医師たちは、オリジナルに創造したのではない。黄老『天道』思想を根拠に練り上げたのである。」⁶⁹⁾と述べ、続けて「天道」思想が見られる『内経』での特徴的な思想として天人合一論(天地人三才思想)と「気」の途切れない循環を挙げている。そうすると、浅井周伯・井原道閔の作業は陰陽論、五行論、天人合一論で表されている『内経』の内容を、天人合一論にまで遡り、組み変えたとも言える。

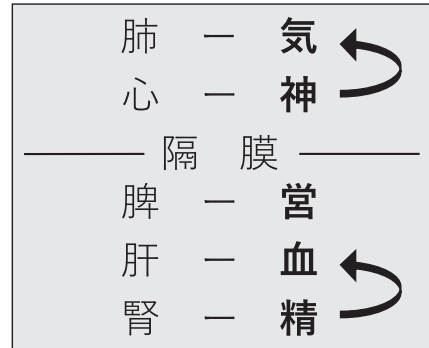


図4 饗庭東庵の五蔵のカテゴライズ(石田秀実「劉医方という誤解」P133より引用改変)



図5 味岡一門の「三蔵」の認識

8.3 流れを意識した医学

五蔵を「三蔵」で組み替えた結果、五蔵六府に焦点をあて説明する『内経』の文章を理解することが難しくなる。そこで浅井周伯は「三蔵」を腎・心・胃でなく「下焦精蔵」「上焦神蔵」「中焦穀府」と呼び、さらに引経方使説も否定し『三蔵之辞』(S06)、それを補う手段として人体を流れるものに焦点を定めたのではないだろうか。そうしなければ自ずと気血・營衛・精神・中焦としたキーワードが議論の中心になるはずである。

彼らのこの視点は、「三蔵」と三焦が結びついた結果であり、饗庭東庵からの流れの中で新たな身体観を提示したと言える。

8.4 味岡一門の医学がもたらしたもの

彼らは五蔵を「宿り場」と考え、「三蔵」と捉え直したことで、五蔵の蔵象ではない、新たな身体

観を作り出した。それは「宿り場に宿る物(神・精)」「それを補佐するもの(気・血)」「それを養うもの(宗営衛)」の相互関係であり、それらの絶え間ない流行を意識したものである。彼らは流体を重視した新たな身体観を『内経』理論から汲み取り実践していたのである。

初学者のための医学の簡便化(臨床化・通俗化)を目論んだ味岡三伯の発案が、伝承の過程で、蔵府機能を精神気血の変化(液体病理学的身体観)と考え、その「虚実」を「太過、不及」「盛、虚」などの量的虚実として三焦論の視点から捉え直した、新たな身体観を示すことになったのがわかる。これは事実上の「日本型三焦弁証」であり、後に吉益東洞の「気血水論」に発展し、さらには現代中医学の「気血津液弁証」につながる独創性、独自性を有するのでは無いだろうか。

第9章 結語

「三蔵」系書籍は21種あり、17種について調査したところ、大きく二つの系統が見られた。一つは初代味岡三伯から小川朔庵へ、もう一つは浅井周伯から井原道閔、岡本一抱に繋がる系統であった。これらの違いは主に篇目順に現れていた。三伯は初学者教育の為に「三蔵」を発案し、先天と後天の重要性を考え「心腎胃」と規定し、胃を最重要とした。「三蔵」の概念は三伯、周伯、道閔への伝承の中で発展を遂げ、胃の重要性は、先天を養い薬効を運ぶことから、上下の交流を助けることへと変化し、結果交流の契機となる万物の始まりこそ重要と説かれる様になった。周伯が篇目順を変更し、系統が別れたのはこの辺りに原因がある様に思える。さらに「心腎胃」は「上焦神蔵」「中焦穀府」「下焦精蔵」と名を変えた。これは饗庭東庵の「五蔵はカテゴリー分けの一つ」「根本の気が大切」という教えをもとにした、精・神・気・血・営の再配分の結果である。このように人体を三焦に分けたことで、『内経』に貫かれる天人合一論を浮き上がらせる事になり、一部易の理論で身体を表すという主張にも繋がった。さらに人体認識の変化として、五蔵の蔵象ではない、流れを意識した視点で人体を見るという、新たな身体

観を示すことになった。

「三蔵」は初学者への教育・臨床の場で使われ、「五蔵たるも三つに帰す」と宣言され、「医道一流の干要」と賞された。これらは、劉医学の影響と言えるものではないのは確かである。むしろ饗庭東庵の講じていた『類経』の影響を思わせるが、今後の課題にしたい。味岡一門が発展させた「三蔵」は、液体病理学的身体観を有した、事実上の「日本型三焦弁証」としてその後発展していく。

謝辞

本研究にご協力をいただきました明治国際医療大学の角谷英治教授、和辻直教授に心より感謝いたします。味岡三伯についての貴重な意見を賜りました吉川澄美先生、本当にありがとうございました。

参考文献

- 1) 富士川游. 日本医学史 決定版. 東京: 日新書院; 1941
- 2) 石田秀実. 劉医方という誤解. 山田慶兒. 栗山茂久 共編. 歴史の中の病と医学. 再版. 京都: 思文閣出版; 2001, p. 119-120
- 3) 長野仁. 吉田流は16世紀の流派と認めがたい—日本で独自に展開した腹部三脘穴からの考察—. 日本医学史雑誌. 2015; 第61巻1号, p. 85
- 4) 饗庭東庵は二代にわたる世襲が確認されている. 長野仁. 『医学師受淵源』について〈上〉. 漢方の臨床. 2014; 第61巻第3号, p. 510-511 本稿では二代目饗庭東庵(饗庭立伯・1615, 1621?-1673)を饗庭東庵と表記し、初代(生没年不詳)を初代饗庭東庵と表記する。
- 5) 前掲注(1), p. 289
- 6) この文脈における「復古考証的な立場」とは、あくまで「明の医家の医経研究に基づくもの」だと思われる 石田秀実. 解説 竹中通庵『黄帝内経素問要語集註』. 石田秀実, 篠原孝市 監修. 黄帝内経要語集註 第2冊. 大阪: オリエン特出版社; 1990, p. 465
- 7) 医学教育・医経研究に重きを置いた医家達のこと. 第2章にて詳述。
- 8) 前掲注(2), p. 125 ただし 河内全節 編 今村亮補. 日本医道沿革考. 東京: 今村亮; 1885, p. 33-34 「後西天皇明曆萬治ノ間ニ至リ林市之進饗庭東庵等出テ金ノ劉完素唱フル所ノ五運六氣ノ説ヲ奉シ又本朝古制ノ醫式ニ本キ素問盡極難経等ヲ講明ス」とあるように、饗庭東庵と劉完素の学を結びつけたのは、石田

- の指摘する富士川游でなく、日本医道沿革考の記述が典拠だと思われる。
- 9) 饗庭東庵に医学を学んだ後、万治2年(1659)に江戸に赴き、太医令半井瑞堅の門をたたき、翌3年(1660)から半井家の家塾で『霊枢』などの書を講じた。前掲注(6), p.467
- 10) 海原亮。江戸時代の医学修行 学問・学統・遊学。東京：吉川弘文館；2015, p.14-15
- 11) 日本の医薬・博物著述年表。真柳誠。http://square.umin.ac.jp/mayanagi/paper01/ChronoTabJpMed.html (参照 2020-2-20)
- 12) 浅田宗伯。皇國名醫傳 卷上。嘉永4(1851)序, 同5(1852)刊。国文学研究資料館。ヤ9-176-1。序例1丁「饗庭東庵, 林一之進, 味岡三伯, 井原道閔, 浅井周伯, 小川朔庵, 堀元厚, 黒川道祐, 竹中通庵, 松井材庵等皆當世ノ名家而人品事蹟未能詳之概從割愛。」とある。
- 13) 前掲注(1), p.291
- 14) 近藤鋭矢。味岡三伯とその周辺のことども。啓迪。1987; 第5号, p.1-8
- 15) 長野仁。臨床鍼灸経絡経穴書集成解題。オリエン特臨床文献研究所 監修。臨床鍼灸経絡経穴書集成。第1冊。大阪：オリエン特出版社；1997, p.18
- 16) 長野仁。臨床漢方内科叢書解題。オリエン特臨床文献研究所 監修。臨床漢方内科叢書 第1冊。大阪：オリエン特出版社；1997, p.12-13
- 17) 「味岡家の四傑」とは浅井周伯(1643-1705)・井原道閔(1649-1720)・小川朔庵(生没年不詳)・岡本一抱(1654-1716)らを指す。浅田宗伯。杏林雑話。慶応3(1867)。富士川文庫。キ/155。1丁表「三伯其学愈盛」とあるが、こうした呼称が着く事自体が、味岡三伯による講義の盛況ぶりが窺え、さらに四傑という名称から、この四人が中心となって講義が行われていたのではないだろうか。そのことは第5章で述べる、それぞれの名を外題に冠した「三蔵」系書籍の存在からもいえる。
- 18) 上地栄。昭和鍼灸の歳月一経絡治療への道一。東京：績文堂；2003；p.12-13。明治以降の日本の鍼灸術は、薬方(漢方)や按摩の補助のごとき地位におかれていた。そのような状況の中で、古典籍を再検討し、鍼灸に治療体系を確立し、日本の鍼灸術として昭和10年代に体系づけられたのが「経絡治療」であり、今尚多くの鍼灸師の治療理論の根拠とされている。
- 19) 岡田明三 監修。名人たちの経絡治療座談会。神奈川：医道の日本社；2015, p.380-381
- 20) 岡本一抱子。医学三蔵弁解(伴尚志訳)。東京：たにぐち書店；2010
- 21) 岡本一抱子。医学切要指南(伴尚志訳)。東京：たにぐち書店；2010
- 22) 吉川澄美。本居宣長『送藤文興還肥序』に見る味岡三伯流医学の影響(その四)。医譚=History of medicine: journal of the Kansai Branch of the Japan Society of Medical History/日本医史学会関西支部 編。2017；105, p.8457-8503 吉川の論文は、本居宣長著『送藤文興還肥序』に見られる、味岡三伯流医学の影響についての研究である。特に書簡の後半部分での「氣」を導入した発病や治病についての立論を、味岡三伯流医学の特徴である「三蔵」と、宣長の学問との接点を考察しながら述べている。
- 23) 前掲注(1), p.281
- 24) 小曾戸洋。新版 漢方の歴史。東京。大修館書店；2014, p.160
- 25) 前掲注(1), p.281
- 26) 「扶桑醫書高説之権輿」とある。桐井玄淑。医範聖意無尽蔵。元文2(1737)刊。富士川文庫。セ/15。47丁表
- 27) 前掲注(24), p.181
- 28) 前掲注(2), p.129
- 29) 「劉医方, 別称を『後世家別派』と呼ばれるこの学派は、(明歴・寛文の間に)、京都に在って講筵を張っていた林一之進・饗庭東庵らが唱え、その弟子の味岡三伯を経て、浅井周伯・井原道閔・小川朔庵(門人に堀元厚)・岡本一抱らに伝わっていく。」前掲注(2), p.123
- 30) 前掲注(1), p.289
- 31) 大日本人名辞書刊行会。大日本人名辞書。首巻。東京。大日本人名辞書刊行会；1926, p.82 「素霊派」の大日本人名辞書における初見は、大正12年の関東大震災での紙型の焼失により新版される際、新たに呉秀三が担当した「医師派譜」中に見られる。
- 32) 三家元珉。老子道德経会元 下巻。寛文7(1667)刊。内閣文庫。191-0277。40丁表
- 33) 加藤謙斎。病家示訓。安永2(1773)刊。慶大富士川。DIG-KEIO-457。13丁裏
- 34) 望月三英。鹿門隨筆。江戸中後期。京大富士川。DIG-KYOT-612。3丁裏
- 35) 長野仁。三浦道斎の事蹟と『難経本義助講録』—『饗庭家遺教素問難経記』の研究—。篠原孝市 監修。脈経版本叢刊第10冊。大阪：オリエン特出版社；1994, p.22-25
- 36) 前掲注(6), p.465
- 37) 前掲注(35), p.22-25
- 38) 編著書に『重広補注黄帝内经素問』二十四卷(いわゆる新校正注本), 『新刊黄帝内经霊枢』二十四卷(吉弘玄仍跋刊本)がある。
- 39) 小曾戸洋。中国医学古典と日本。東京：塙書房；1996, p.86
- 40) 前掲注(35), p.22-25
- 41) 草刈三越については、味岡三伯の弟子という説もある。長野仁。解説 臨床実践家伝・秘伝・灸書集成解題。オリエン特臨床文献研究所 監修。臨床実践家伝・秘伝・灸書集成 第一冊。大阪：オリエン特出版

- 社；1996，p.17
- 42) 前掲注(14)，p.1-8 二代目三伯(淡水)(1666-1726) 三代目三伯(玄二)(1686-1738)
- 43) 浅田惟常. 皇国名医伝 巻下. 明治6(1873)刊. 国会図書館. 132-28. 24丁表
- 44) 水雲堂 孤松子. 京羽二重 巻六. 貞享2(1685) 序 同刊. 国文研. ヤ6-321-6. 12丁表裏
- 45) 水雲堂. 京羽二重 巻三. 宝永2(1705)刊. 早稲田大学. ル04 03771. 8丁表裏
- 46) 京都府医師会医学史編纂室. 京都の医学史 資料篇. 京都：思文閣出版；1980，p.448
- 47) 矢数道明. 浅井氏家譜大成. 東京：医聖社；1980，p.3-6
- 48) 前掲注(12). 48丁表
- 49) 宇津木益夫. 日本醫譜 巻九. 成立年不詳. 慶大富士川. DIG-KEIO-407. 写3/6冊. 8丁表
- 50) 「先師味岡畏推(三伯)先生始て發明也」『三藏之弁口授』(S09)とある。『三藏弁』(S12)にも同様の記述がある。
- 51) 山田慶兒. 浅井周伯の養志堂の講義録 松岡友達自筆本再考. 吉田忠, 深瀬泰旦. 東と西の医療文化. 京都：思文閣出版；2001，p.73-92
- 52) 原文の片仮名は原則平仮名に変更した。句読点，括弧内は著者が加えた。読みやすくするために仮名を漢字に変更した箇所もあり，変更部分はルビ表記を添えた。「三藏」系書籍からの引用文については以下同様とする。
- 53) 味岡三伯に関連した「三藏」系書籍を眺めると，書名や「三藏」という名称，「三藏」の構成項目である「上焦神藏」「下焦精藏」などで，「藏(藏)」と「臟」の字が混在している。「藏」には，「藏(藏)」(①かくす②かくれる)と，「臟」(①くら②はらわた→臟) 諸橋轍次，鎌田正，米山寅太郎. 廣漢和辞典初版. 東京：大修館書店；1981；下巻，p.466 といった意味の違いがあるが，本稿では，「藏」の字形の違いが彼らの思想を強く示していないと判断し「三藏」に関しては「藏」で統一表記し，引用文は原文に従った。
- 54) <http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/> (参照2018-10-20)
- 55) 三浦忠司. 安藤昌益の「儒道統之図」の発見とその意義. 岩手史学研究. 1999；第82号，p.40-41
- 56) 和田耕作. 京都の医師・味岡三伯と安藤昌益一新資料「儒道統之図」の考証と解釈. PHN(思想・人間・自然). 1999；第8号，p.16-24
- 57) 堀元亨. 南観象方考. 天保14(1843)序. 内藤くすり大同. 35756-490
- 58) 篠原孝市. 解説 森嶋玄勝『内経病機撮要弁証』. 石田秀実, 篠原孝市 監修. 黄帝内经要語集註 第5冊(別冊1). 大阪：オリエント出版社；1990，p.554-555
- 59) 胃を藏とすることについて，ほとんどの「三藏」系書籍では，このように書名と篇目だけを示すが，『三藏弁解』(S04)(小川系)には，「靈枢(原文ママ)秘典論に，黄帝曰願聞十二藏之相使貴賤何如，岐伯云々」「六節藏象別論，或以腸胃爲藏云々」と，典拠が示される。つまり『素問』靈蘭秘典論篇で六藏六府を十二藏と呼んでいることや，五藏別論篇で胃腸は藏であるという経文を根拠にしている。
- 60) 下線部については，意味が通らず脱字である。異本関係だと思われる，『三藏弁解』(S17)に従い，括弧内に改めた。
- 61) 前掲注(2)，p.134
- 62) 異本関係にあると思われる，『三藏弁解』(S08)『三藏之弁』(S17)に倣い「精神」を「精粹」と作る。
- 63) 天と地はもともと混沌として一つであったのが，天と地に分離したとする中国の古代思想を背景に成り立った表現
- 64) 異本関係にあると思われる『三藏弁並麻疹論』(S14)に倣い，「腎陽」を「腎陰」に作る。
- 65) 井原系『医学三藏弁』(S13). 20丁裏 本文中にも「切紙五藏六府篇」と書名の記載が見られる。
- 66) 前掲注(2)，p.131。「五藏それぞれに，肝心脾肺腎の名が立てられたのは，上古の聖人が，天地の理に則って，その『然ル所以ノ理ニ推本ヅケ』で命名したのだ，という立論から始まる。いわんとすることは，五藏は(中略)あくまで理法によるカテゴリー的な命名だ，という点にある。」
- 67) 前掲注(2)，p.131-134
- 68) 同上
- 69) [http://tokyo89am.or.jp/wp-content/uploads/2016/06/%E3%80%88黄帝と老子>雑観%E3%80%80第9回-天地人三才思想の源流は黄老文献にあり-『黄帝内经』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ\(その3\)-松田博公-週刊『あはきワールド』.pdf](http://tokyo89am.or.jp/wp-content/uploads/2016/06/%E3%80%88黄帝と老子>雑観%E3%80%80第9回-天地人三才思想の源流は黄老文献にあり-『黄帝内经』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ(その3)-松田博公-週刊『あはきワールド』.pdf) (参照2018.10.20)

Investigation of *Sanzo* and Similar Books Written by the Ajioka Family

Masaya NAKA¹⁾, Munenori SAITO²⁾

¹⁾Kansai Kanpou Houtoku Society

²⁾Department of Acupuncture and Moxibustion, Faculty of Health Science,
Suzuka University of Medical Science

Ajioka Sanhaku, a doctor in the early Edo period, like his teacher Aeba Toan, is recognized as one of the doctors belonging to the Goseibetsu School. However, this information alone is inadequate to characterize the medical thinking of Ajioka Sanhaku. To unravel the medical thought of Ajioka Sanhaku, the present article focuses on *Sanzo*, which is regarded as an “Ajioka Sanhaku invention.” Books written by Ajioka Sanhaku and Ajioka’s school’s four excellent disciples (Azai Syuhaku, Ihara Doetsu, Ogawa Sakuan, and Okamoto Ippo) are reviewed. Furthermore, the background of the ideas of *Sanzo* and its medical perspectives are examined. *Sanzo* was propounded as a novel concept based on Aeba Toan’s theory of five viscera. The invention of *Sanzo* and its utilization led to the emergence of the concept of the Three Geniuses (Heaven, Earth and Men) that penetrated *Huangdi’s Internal Classic*. We believe that in adopting the theory of *Sanzo* they supported a view of medicine emphasizing the “qi-blood” flow contained in *Sanzo*, rather than the “Viscera State”.

Key words: Ajioka Sanpaku, Goseibetsu-School, *Sanzo*, Asai Syuhaku, Medical school